
たっくんとクサヤおばちゃんと

タカヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たつくんとクサヤおばちゃんと

【Nコード】

N7697F

【作者名】

タカヤ

【あらすじ】

拓（八歳児）と咲弥（22歳、OL）の日常を綴ります。おやつ
のつまみにどうぞ。（注・中身は会話文のみとなります。四コマ漫
画なノリです）

1 クサやおばちゃん（前書き）

まあ、
気晴らしに。

1 クサヤおばちゃん

1、クサヤおばちゃん

「ねえ、クサヤおばちゃん」

「はい、呼んだ？ って、誰がクサヤよ！ そんなもんの名前自分の子供につける親がいたら見てみたいわ！」

「……サヤク？」

「咲弥よ！ さくや！ サクヤ！ おっけ！？」

「うん。オッケ」

「で、何よ。何か用？」

「うん。僕、クサヤおばちゃんに聞きたいことがあるんだ」

「……私の魂の叫び、もとい、至高のツツコミを無視するなんてい度胸ね。あんたが甥じゃなかったら、この場で即刻打ち首獄門にしているとこよ」

「『しこう』『おい』『そっこく』『うちくびごくもん』ってなに

？ 日本語？」

「そうよ。あんたの知らない単語全てが他国語だとは思わないことね」

「ふーん。すごいね。日本」

「そうよ、すごいだよ。案外ね」

「えっと……あれ？ クサヤおばちゃんに何聞こうとしたのか忘れちゃったよ」

「そう。だったら、この機会に憶えとくのね。私の名前は咲弥よ。はい、忘れないうちに復唱して」

「『ふくしょう』？ ってなに？」

「私の言ったことと同じことをそのまま真似して言うことよ。分かった？」

「うん。分かった」

「はい、じゃあ復唱。『咲弥お姉さん』」

「クサヤおばちゃん」

「分かってねえよっ！」

「っていうか『クサヤ』ってなに？」

「……無邪気なら全てが許されるなんて思ってたら大間違いよ？」

「『無邪気』？」

「あんたのことよ。ってか、駄目。あんたと話していると疲れる。後五年ぐらい人生経験積んで出直してきてちょうだい」

「じゃあ、お母さんに聞く。聞きたいこと思い出したから」

「……ふーん。ところで、あんたの聞きたいことってなによ」

「『でもどり』」

「……」

「おかあ——」

「ちょっと待てええ！」

2 出戻りの意味

2、出戻りの意味

「なあに？ クサヤおばちゃん」

「いいわ。緊急事態よ。今はあんただけのクサヤおばちゃんよ。私の呼び名訂正させてる場合じゃなくなったわ」

「だから、なあに？」

「いい、拓？ その言葉だけは何があってもお母さんの前で言っちゃ駄目よ。今は特に駄目。そうね……三年位経ってまだどうしても気になるって言うなら、その時は聞いてもいいわ」

「えーどうして？」

「大人の事情よ」

「大人のジョージ？」

「違う！ 事情よ、事情！ あんたが知るにはまだ健全に育って八年ぐらい早いわ！ ってか、今ので世のジョージさんの印象変わっちゃうじゃないの！」

「大人の事情？」

「そう、それ！ 重いよ。苦しいのよ。まだ八歳児のあんたには分かんないでしょうけどね」

「なに、それー」

「今は知らなくていいわ。嫌でも知らなきゃなんなくなるから。それまでは無垢でいるのよ。今のあんたは眩しいぐらい輝いてるわ」

「『むく』ってなに？」

「それはあんたのことよ」

「じゃあ『でもどり』は？」

「それはあんたのお母さんのことよ——って、しまった！ 乗せられた！ 八歳児に！？」

「おかあさん。クサヤおばちゃんが——」

「待ってっ！ 待つのよ、拓！ 今の嘘！ 嘘だから！」

「えー、嘘なの？」

「そ、そうよ！ ほんととは……えっと、そ、そう！ ほんととはこういうことなのよ！」

3 つまり、いづいづいと

3、つまり、こういうこと

「昔昔、あるところにおじいさんとおばあさんがいました」

「あ、聞いたことあるお話だ」

「黙って聞いてなさい。おじいさんは山に芝刈りに。おばあさんは川に洗濯に。おばあさんが川で洗濯をしていると、大きな桃が川上から流れてきました。食ってやろうと、おばあさんは貪欲にも大きな桃を家に持ち帰りました」

「『どんよく』ってなに？」

「欲張りってことよ。家に持ち帰った桃を切ってみるとあら不思議。中から女の子が現れました。おじいさんとおばあさんは、その子を桃子と名づけました」

「桃太郎じゃなくて？」

「女の子なのに、太郎はおかしいでしょ」

「うん。でも、桃子ってお母さんと同じ名前だ」

「そうね。すごい偶然ね。で、おじいさんとおばあさんの元、すくすく育った桃子はやがて十八歳を迎えました。高校を卒業した桃子は東京の大学に進学しました。慣れない一人暮らしもなんのその。桃子は大学でイケ面をゲットし、結婚まで持ち込みました」

「イケ面って何？」

「あんたのお父さ——元、お父さんみたいな人のことよ」

「ふーん」

「しかし、なんやかんやで二人は別れることとなりました」

「なんでー？」

「大人の事情よ」

「分かった。聞いちゃダメなんだよね」

「そうよ。いい子ね。で、桃子は一人息子を連れ、実家に帰りましてさ。めでたし、めでたし」

「そのお話って実話なの？」

「いいえ。断じて架空のお話よ。おとぎ話よ」

「『だんじてかくう』ってなに？」

「作り話ってこと。で、このお話のタイトルが『でもどり』なのよ。分かった？」

「そっか。でもどりっておとぎ話のことだったんだ」

「そう！　そういうこと！　そういうことにしといて！」

「うん。じゃあ、お母さんにも教えてあげよ。おかあ——」

「ちよっ！　おまつ——待て、お前っ！」

「なーに？」

「……お、思わず取り乱しちゃってごめん。ってか、あんた私で遊んでるわけじゃないわよね？」

「え？　何が？」

「……いいわ。信じるわ。あんたのその濁りのない目を信じるわ。とにかく、お母さんにはこのお話は内緒にしなきゃいけないのよ」

「大人の事情？」

「そ、そう。大人の事情よ」

「うん。なんだか分かんないけど、分かった」

「拓……あんた、この短い間に少しだけ大人になったわ……」

4 結局、なんで？

4、結局、なんで？

「ところで、拓。あんた、どこで『出戻り』なんて言葉憶えてきたのよ。もしかして、あんた、学校でいじめられてんじゃないでしゅうね」

「えー？　なんで？」

「なんでって、そりゃ……あんた学校で『やーい、やーい、お前の母ちゃん出戻りでやんの』とか言われたんじゃない？」

「あれ？　『でもどり』っておとぎ話じゃなかったの？」

「え？　あ……そ、そうだったわね。おとぎ話よ。そんなおとぎ話が世間にはごまんと広まってるの」

「ふーん。でも、広まってるんなら、お母さんに内緒にしくてもいいんじゃないの？」

「ふっ……。大人の事情よ、拓」

「あ、そっか」

「で、結局どこで憶えてきたの、あんた」

「んとね、学校——」

「そりゃ分り切ってんのよ。誰が言ってたの？ まさか、同級生じゃないでしょうね。『出戻り』の意味知ってる八歳児って、只者じゃないもの。番長張れる器よ」

「『ばんちょう』ってなに？」

「昭和の遺物よ」

「『しょうわのいぶつ』ってなに？」

「いちいち説明するのめんどいから適当に流してよ。どうしても気になるのだけ聞きなさい。話進まないから。いい？」

「うん」

「いい子ね。で？ 誰が言ってたの？ まさか、同級生じゃないでしょうね。『出戻り』の意味知ってる八歳児って、只者じゃないもの。番長張れる器よ」

「『ばんちょう』ってなに？」

「どうしても気になるお年頃なのね……。いいわ。適当にあしらったら無限ループしそうだから観念するわ。番長ってのは、学校で一番喧嘩の強い奴のことよ」

「ふうん。それってすごいのか？」

「そうね……でも、社会に出たら腕っ節なんて何の役にも立たないわ。プロの格闘家になって食べていく、ぐらいの覚悟がなきゃ、番長なんてなるもんじゃないわ。あと、暑苦しいしね」

「そうなの？」

「年がら年中学ランススタイルよ。頭おかしいのよ」

「がくらん？」

「学生服のことよ」

「じゃあ、番長って真面目な人なんだね。だって、学生服が好きなんでしょ？」

「あー……そう来たか。んーそうね。根は真面目なのかもね。頭に馬鹿がつくけど」

「馬鹿真面目？」

「そう、馬鹿真面目。よかったね、結論が出て。間違っても憧れたりしちゃ駄目よ。頭リーゼントになっちゃうからね」

「『リーゼント』？」

「……しまった。余計なことを」

「ねえ『リーゼント』って何？」

「……拓？　なに目を輝かせてるの？　駄目よ？　憧れちゃ駄目よ？　私があんたのお母さんに殺されちゃうじゃないの」

「ねえねえ、教えてよ、クサヤおばちゃん。『リーゼント』。『リーゼント』」

「ああ、もう！　分かったわよ！　リーゼントにそこまで食いつく八歳児はあんたぐらいのもんよ、もう！　ちよつと待ってなさい！」

5 リーゼントとアルバム

5、リーゼントとアルバム

「ほら……私の高校の卒業アルバムよ。押入れの中で六年も眠ってる奴を無理やり叩き起こしてやったわ。アルバムぶちギレよ。見る前に一言わび入れときなさいよ。じゃないと開いた瞬間噛みつかれるわよ」

「ほ、ほんと？」

「ほんとよ」

「でも、その前に『わび』って何？」

「土下座して『すんませんっしたー！』って叫べばいいのよ。オツケ？」

「う、うん。オツケ」

「はい、じゃあ正座して。そう、土下座しながら、両手は前に突き出して、そのかっこのままアルバム持って。よし——今よ！」

「す、すんませんっしました！」

「……駄目ね」

「え！」

「拓。あんた、肝心なところで噛んだわね。『すんませんっしした』
になってたわ。『し』が一個多かったわ。アルバムもうカンカンよ。
ほら、表紙が色あせてるでしょ？ マジギレの証拠ね」

「ご、ごめんあさい！」

「また噛んだわね。はあ……もう取り返しつかないわ。あんた喰わ
れるわよ。開けたら確実に喰われるわ。悪いことは言わない、諦め
なさい……」

「そんなぁ……」

「……なによ、そんな捨てられた子犬みたいな目でこっち見ないで
よ。——あ、そうだ。いいのよ。私のじゃなくてもいいじゃない。
お姉ちゃんがあるじゃない。なんで気付かないかな、私」

「え？」

「ちょっと待ってなさいよ、拓。今、あんたのお母さんの高校の卒
業アルバム引っ張り出して来たげる」

「う、うん……」

「——ほら、これ」

「う、うわっ！ クサヤおばちゃん！ このアルバムすっごく怒ってるよ！ クサヤおばちゃんのアルバムよりずっと表紙がボロボロだもん！ やばいよ！」

「そりゃ、年季入ってるもの。私より四年」

「す、すいませんっした！！」

「なに、土下座なんかして謝ってるのよ。ほら、これがリーゼントよ。お分かり？」

「あ、あれ？ アルバム……噛みついてこないよ？」

「だって、アルバムだもの」

「……クサヤおばちゃん？」

「だって、あんた、私のアルバム開いたら絶対リーゼントだけじゃ満足しないでしょ。『おばちゃんはどこどこ』とか言い出すでしょ。でもね、あのアルバムの中には誰にも触れられたくない忌まわしい過去の私が居ついてるのよ。人生どん底時代の私がいるのよ。誰にも触れられたくないの。分かる？」

「な、なんか怖いよ、クサヤおばちゃん……」

「そんなことより、ほら。これがあんたが待ち望んだリーゼントよ。どの学校にも一人ぐらいは気合入った馬鹿はいるからねーって、どうしたの、拓。浮かない顔して」

「うん……。なんかもう『リーゼント』とか、どうでもよくなっち

やった……」

「よし、作戦成功」
ぼそり

「え？」

「ん？ なんでもないわよ？」

6 結局なんで? の続き

6、結局、なんで? の続き

「さあ、拓。いい加減観念して洗いざらい話しなさい。誰があんたに『出戻り』なんて言葉を吹き込んだの。それとも、このまま黙秘を続ける気?」

「『黙秘』って何?」

「要するにシカトね」

「『シカト』って?」

「無視」

「僕、無視なんてしてないじゃない」

「うん、のんびりしたツツコミありがとね。じゃあ、終わったところで吐きなさい。犯人は誰?」

「んっとね。知らない」

「……そう。とぼける気ね? ——いいわ。とことん付き合うわよ。」

あんたが吐くまで徹夜でも何でもしてやるわ。挨拶代りにカツ丼出前取ったげるわ」

「そうじゃなくてね、知らない人なの」

「……どうやら、吐く気になったみたいね。そのまま続けて」

「ところで、クサヤおばちゃん、そのサングラスとトレンチコートどこから持ってきたの？」

「そう。とぼける気ね？ 後の――の間に私の部屋から取ってきたのよ。こういうのはムードが大事なのよ。ほら、吐く気になってきたでしょ？」

「あ、うん。なんとなく」

「ふふん。しょせんは子供ね、拓」

「うん。子供だよ、僕」

「……あんたと知り合ってまだ24時間も経ってないけど、あれね。あんたって、あっさりしてるよね。何か……うん、素直っていうのね。あんた素直だわ。生意気なガキやマセたガキがはびこる昨今、珍しい希少種ね。貴重だわ。この咲弥お姉さんが認めたげる。あんた、特別天然記念物に指名したげるわ」

「『とくべつてんね――』」

「とにかくすごいのよ」

「どれぐらい？」

「国が認めるぐらいね」

「すごいね！」

「でしょ。でも、あんたを認めてるのは私一人だけだね」

「……あれ？」

「なによ、不満なの？ 馬鹿ね。秘湯を考えてみなさいよ。あれは、一部の人間しか知らないからこそ、その価値は絶大なのよ。分かる？」

「『秘湯』ってなに？」

「そこから分かんないのね……。いわ、教えたげる。秘湯ってのは、山奥にある温泉のことよ。他人に知らせたくないような温泉なのよ」

「どうして？」

「そりゃ、すごいからよ。すごいもんは独り占めしときたいのが人情ってもんよ」

「ふーん。それって、どれぐらいすごいのか？」

「えーと……—テレビで旅番組に特集されるぐらい、かな」

「ふうん……」

「やっぱ、子供にはウケ悪いわね。ってか、私もそんなの見ないし――って、とにかく！ いい、拓！？」

「う、うん！」

「秘湯ってのは、人に知られていないからこそ、秘湯足り得るのよ！ 行列のできる秘湯なんて、興醒めよ！ そんなのはもう、秘湯とは呼ばないわ！ 行列○できる法律相談所みたいに、弁護士にキヤラを求めて、結局お笑いに走らせるぐらい興醒めよ！ 他人の悩みをネタに番組作った上に、全国ネットで晒すなんてそれこそ訴えられんじゃない！？」

「よく分からないよ、クサヤおばちゃん……」

「八歳児には少し難しすぎたみたいね。えっと、つまり秘湯ってのは人知れず存在してこそ、秘湯なのよ。認知されてないほど価値は高いのよ」

「『にんち』って？」

「知ってるってことよ。……案外私、辛抱強いのね」

「え？」

「なんでもないわ。ついて来てよ。つまり、知られてないほど、価値が高まるものもある。そして、何を隠そうそれが拓！ あんたなのよ！」

「……う、ん？」

「頑張っについて来て。つまり、何が言いたいのかというと――」

「クサヤお婆ちゃん、僕のこと好きなの？」

「……へ？」

「そういうこと？」

「――えーと……。ま、まあ、可愛い甥だしね。もちろん、嫌いじゃないけど」

「僕もクサヤお婆ちゃん好きだよ」

「……なによ、この『私が素直になれない女』みたいなオチ……」

7 指きりげんまん

7、指きりげんまん

「思わぬダメージを負いはしたけど、私の心はこの程度じゃ折れないわよ。この程度の傷、どん底の高校時代に比べれば屁のツツパリにもならないわ。さあ、吐きなさい、拓。犯人は一体誰!？」

「それより、クサヤおぼちゃんの高校時代になにがあったの?」

「秘密よ。なぜなら、女は秘密を着飾って美しくなるものだからね」

「そうなの?」

「そうよ。便利なごまかし文句でしょ?」

「ごまかしてるの?」

「ごまかしてるの」

「……」

「……」

「……」

「……教えないわよ」

「どうしても？」

「どうしてもよ」

「お母さんに『でもどり』のお話するって言っても？」

「た……拓！ あんた、なんてこと……！ こ、この私を脅すつもり！？ あんただけは、そういうことないと思ってたのに！？」

「ううん。言ってみただけ。もしかして、クサヤおばちゃん、僕がお母さんに『でもどり』のお話したら困るの？」

「いや……私が困るっていうか——まあ、それで空気微妙になるのもあれだし……とばかり私にもくるだろうし……困るけど……そんなのが私の弱みと思われるのもなんかね……」

「困るの？」

「うつ、く……そ、そうよ！ 困るのよ！ でも、これだけは言っとくわよ！ 困ることになるのはあんただって一緒——」

「じゃあ、内緒にしとく」

「——へ？ あ、あれ？」

「なーに？ だって、困るんでしょ？ だったら内緒にしとく。は

い、指きりげんまん」

「うっ……ま、眩しっ！ あんた眩しすぎるわ。そんな純粋な目で私を見つめないで……」

「嘘ついたら針死ぬまで飲めます♪ 指き——」

「って、待って！ きらないで！ まだきっちゃダメ！」

「い、痛いよ、クサヤおばちゃん。そんなに指強く絡ませないでよ」

「拓……？ あんた、今可愛い顔してとんでもないこと言ったわよね？ 嘘ついたら？」

「え？ 嘘ついたら、針死ぬまで——」

「ダメ！ やりすぎよ！ 死ぬまで飲ませちゃダメ！ 千本飲んでもショック死確定だけど、そこはあえてソフトに表現してんの！ 千本飲ますってのがちょうどいい大袈裟さなのよ！ 死ぬまでって、もう、元も子もないわ！ それじゃ、全然微笑ましくなんないわ！」

「でも、お母さんはお父さんと約束する時、いつもそう言ってたよ？」

「……拓。それは約束という名目の脅しよ」

「え？ でも、お母さんもお父さんも笑ってたよ？」

「間違いなくお父さんののは苦笑いね」

「『苦笑い』ってなに？」

「追い詰められた人間の苦し紛れの行為よ」

「追い詰められて、何で笑うの？」

「いつか分かる時が来るわ」

「いつかって？」

「いつかよ」

「ふうん」

「とにかく、これから『針千本飲ます』にしときなさい。いい？」

「うん。分かった。じゃあ、針千本飲ます♪ 指きった」

「今までひねくれずに済んだのが奇跡ね……」

8 なになにに攻撃

8、なになにに攻撃

「もういいでしょ、拓？ これ以上話逸れ続けたら、永遠に『出戻り』の犯人にたどり着けないわ。って、なんか犯人がイタイ感じになっちゃったけど、おあいこよ。グラサンにトレンチコートの出で立ちしてる自分の姿を今更想像して、イタイのよ。ってわけでこれ取るわよ？ いい？」

「うん。いいよ」

「いい子ね。さあ、拓！」

「わ……びっくりした」

「教えなさい！ あんたに『でもどり』を吹き込んだ犯人は誰！
こんだけ引っ張っという『忘れちゃった。えへへ』なんて回答は許
されないわよ！」

「忘れちゃった。えへへ」

「うおおい！？」

「なんちゃって」

「……拓。あんたやるようになったわね」

「そう？」

「私の『振り』に対応できるほど成長したのね。さすが、大人の事情を察せる八歳児。意味は分かってなくて、素直に言うこと聞けるだけって事実は置いといてね」

「？　ところで、クサヤおばちゃん。『振り』ってなに？」

「来たわね、なになに攻撃。またそうやって話逸らす気？　その手には乗れないわよ」

「なんのこと？」

「く……その悪意のない目で私の良心に付け込もうって魂胆ね？　そうはいかないわよ？」

「『こんたん』ってなに？」

「あんたには無縁の言葉よ。覚えなくて良し」

「そっか」

「って、しまった。私としたことが、つい……。ふふ。恐ろしい子供に育ったものね、拓。あんた、そうやって無意識に他人を追い詰めていくのよ。魔性の子よ」

「『魔性』ってなに？」

「あんたのことよ！　って、しまった！　また、乗せられたって私の馬鹿ーあ！」

「クサヤおばちゃん、大丈夫？」

「……やめて。やめてよ。同情するなら金をくれ！」

「え、お金？　えっと……」

「違う！　違うわ！　ほんとに欲しいのはツツコミよ！　金くれつつってホントに出されたら、家なき子も困るでしょ！」

「『家なきー』」

「いや！　これ以上私を追い詰めないで、この人でなしっ！」

「『ひとでー』」

「いやあああああ！！」

「……大丈夫？　クサヤおばちゃん」

「……同情するなら金をくれ」

「え、また？」

「……」

「あ、そっか。えっと……『なんでツツコミやねん!』」

「……拓? 今のはなに?」

「え、ツツコミだよ。お金が欲しいって言いながらツツコミを待ってる人に、だったらツツコミ頂戴っていいなよって、ツツコミ」

「……ねえ、拓」

「なーに?」

「あんた、ツツコミの才能ゼロね」

「え……!」

9 笑いの才能

9 笑いの才能

「クサヤおばちゃん。それ……ほんと？」

「ええ。残念ながらほんとよ。諦めなさい、拓……」

「でも、僕お笑い番組好きだよ。いつも見てるよ？ ラ○ララ
イ体操とかできるよ？」

「拓……。お笑いにも種類があるのよ。それは漫才じゃないわ。そして、お笑いの正統派は漫才なのよ。っていうか、最近そのコンビ見かけないわね（ぼそっ）」

「？ 漫才って、コントのことでしょ？」

「違うわ。漫才とコントは違う。昨今はびこってるコントは、なんでもありなのよ。あれは、邪道だわ。勢いがありやいいってもんじやないのよ。デブがいりやいいってもんじやないのよ。インパクトがありやいいってもんじやないのよ。奇天烈ならいいってもんじやないのよ。グーグー言って二十四時間マラソンに挑戦すればいいってもんじやないのよ。分かる？」

「よく分かんないけど、最後のは分かった。僕、エドはる○好きだもん」

「そうね。彼女は頑張ってるわね。なんとなく気品があるものね」

「うん」

「でも、あの人は漫才師じゃないの。それはつまるところ、彼女は邪道突き進む悪鬼ってことよ。分かる？」

「『あっき』？」

「平仮名にするとなんかアイドルのニックネームみたいだけど、その正体は悪い鬼よ」

「え！ エドは○みて鬼だったの！？」

「そうよ。誰も知らない真実よ。嘘だけどね」

「……え？ どっちなの？」

「比喻表現よ。人間だけど鬼なのよ」

「『ひゅ』？ 人間なの？ え？」

「つまり『鬼人』ってことね。『おにんげん』とでも憶えときなさい」

「よく分かんないけど、すごい人ってこと？」

「そうよ。一年中休みなしってぐらいすごいよ。正確なスケジュールは知らないけど、おそらくね。ダイ〇といい勝負ね」

「ダ〇ゴって、竹〇元総理のお孫さんのあの人のこと？」

「そうよ。〇下元総理を知ってるなんて、なかなかやるわね、拓」

「だって、それがあの人のキャッチフレーズでしょ？ 知ってるよ」

「ええ。お爺ちゃんが元総理大臣ってだけで芸能人は売れるものなのよ。いくら、後から彼自身の魅力とか言ってみたところで、元総理の孫ってのを明かしてからブレイクしてちゃ説得力ゼロよ」

「でも、あの人面白いよ？」

「そこが問題よ。お笑い芸人でもないのに、バラエティー番組に引っ張りだこなのってどうよ。彼はああ見えてミュージシャンなのよ。知ってた？」

「へえ。それは知らなかったよ」

「でしょ。いい歳こいて『ぶっちゃけ、いいすか』って言ってる場合じゃないのよ」

「ねえ、クサヤおばちゃん？」

「ん？ なによ」

「〇イゴのことより、僕にツツコミの才能がないって話はどうなったの？」

「なによ、拓。あんたまだ未練あるの？ 諦めなさいって言ったでしょ。好きなだけじゃ、世の中駄目なのよ。食べていけないのよ」

「そ、そんな……。僕、頑張るよ！？」

「……拓？ ひとつ訊いてもいい？」

「なーに？」

「あんた、もしかして、将来お笑い芸人になりたいとか思ってる？」

「うん。だって、面白いもん」

「衝撃のカミングアウトね。お母さんが知ったらヤバイわよ。あんた、それお母さんに言っちゃ絶対駄目よ？」

「なんで？」

「大人の事情」

「そっか。分かった。指きりげんまん」

「いい子ね。……さて。じゃあ、心苦しいけど育たないうちにその芽を摘ませてもらうわよ」

「え？」

「なんでもないわ。それより、拓！ 覚悟はいい！？」

「え。な、何が始まるの？ クサヤおばちゃん」

「決まってるわ！ 笑いの特訓よ！？」

10 特訓

10 特訓

「笑いの……特訓？」

「そうよ。特訓よ。ローマは一日にして成らずよ。あんたが思ってるほどお笑いの道は易しくないのよ。どれぐらい厳しいのかは知らないけど、きっと、それは世間の厳しさに通じてるはずよ。だったら、OLの私にも教えられるはずよ」

「『OL』ってなーに？」

「オフィス、レディー。女性の会社員や事務員のことよ」

「ふうん。クサヤおばちゃんって、OLだったんだ」

「そうよ。知らなかったの？」

「うん。お母さんがクサヤおばちゃんのこといつつも『しょうがない奴』って言ってて、テレビで『ニートはしょうがないねえ』って言ってて、だから、ニートだと思ってた」

「なんじゃ、そりゃ……。ってか、しょうがないって、あんたの母

「親にだけは言われたくないわ」

「え？　なんで？」

「う……と、とにかく！　私の認識を改めた上で特訓よ！　笑いの特訓！」

「笑いに特訓が必要なの？」

「拓。あんた今の発言で世のお笑い芸人とその予備軍の全てを敵に回したわよ」

「え……！」

「とりあえず、詫び入れときなさい。覚えてたの」

「す、すみませんっした！」

「よし。じゃあ、始めるわよ」

「ところでクサヤおばちゃん。『でもどり』の犯人はいいの？」

「二の次よ。今はあんたをなんとかしないとね」

「えへへ。ありがと、クサヤおばちゃん」

「え？」

「だって、僕のこと応援してくれるんでしょ？」

「ま、まあね……。こ、心を鬼にして特訓したげるわ。これもすべてはあんたのためよ」

「うん」

「じゃあ、致命的なツツコミからよ。拓。私がボケるから、あんたツツコんでみなさい。いい？」

「おっけ」

『いやいや、あつはなついでんな』

『なんで急に関西弁やねん！』

「……ちよつと」

「え？」

「なによ、今のは」

「なになって……」

「違うでしょ。今のは『それを言うなら夏は暑いだろ！』ってツツコむところでしょ。なんで急に関西弁って、なんとなくよ。ほっときなさいよ。ってか、あんただってツツコむ時関西弁じゃないの」

「えへへ。僕もなんとなくだよ」

「笑ってる場合じゃないわよ、拓。あんた、こんな超下級のやってる方が恥ずかしいボケに対応できないなんて……もはや救いようが

ないわよ」

「そ、そんなあ……」

「この際、ツツコミはきっぱり諦めた方がいいわね。まだ未知数のボケにチャレンジよ」

「う、うん」

「はい、じゃあなんでもいいからボケてみなさい。この私が華麗にツツコんでやるわ」

「うん。『むかしむかしあるところに、おじいさんとおばあさんがおりました。おじいさんは川に洗濯に。おばあさんは山に芝刈りに出かけました』」

『家庭的なおじいさんに、甲斐性のあるおばあさんやね』

『おしまい』

『チャンチャン、っておい！ 早すぎるやろ！ 中身全然詰まってないやん！』

『そんな平凡な爺さんばあさんに、変な期待かけられても困るで』

『いや、平凡なんかいい！』

『そやで。平凡な爺さんばあさんやで。そのどこが悪いねん』

『誰も悪いなんて言うてへんやろ！ ってか、この場に平凡な爺さ

んばあさんの話持ち出したお前が悪いねん!」

『なんやねん。そない言うなら、お前見本見してみいな』

『ええで。よう見とけや。こういうのは、インパクトが大事やねん。ただの爺さんばあさんの話なんか誰も聞く耳もたんで』

『ただじゃなくて、平凡やろ!』

「――……ちよつと、拓」

「え? なあに、クサヤおばちゃん」

「あんた……とことんツツコミ下手ね」

「え……!」

「つてか、ボケろつつつたのに……」

「あ……」

11 骨折り損

11 骨折り損

「途中まではいい感じだったわ。とても八歳児とは思えない完成度だった。でも、あんたがツツコミに回った瞬間、全部ぶち壊しよ」

「そんなぁ……」

「そんな、じゃないの。そんな顔したって駄目なもんは駄目よ。あんた、ステージに立った時、客からブーイングが来たらどうすんの。『そんなぁ……』なんて言って許してもらえろと思ったら大間違いよ。そんな修羅場を笑いで切り抜けてのけるのがお笑い芸人ってものなのよ。つまり、私の駄目出しに笑いで切り返してこなかった時点であんた失格なのよ。分かる？」

「……」

「……拓？」

「そんなの関係ねえ！ そんなの関係ねえ！ はい！ オッパッ○
ー！」

「……」

「あ、あれ？ クサヤおばちゃん？」

「あんたって奴は……呆れてものも言えないわ」

「え……」

「他人のネタをパクッた時点で大ひんしゆくだつてのに、よりによつて、小島よし〇……。あんた、一発屋になりたいの？」

「『一発屋』ってなに？」

「一発売れた後に、まったく姿を見せなくなる芸人のことよ」

「？ なんで売れたのに姿を見せなくなるの？」

「それが芸能界だからよ」

「どういうこと？」

「あんたが知るにはまだ早いわ。ってか、OLの私が芸能界の裏側知ってるわけないでしょ」

「？ 裏側？」

「う……せ、世界には表と裏があんのよ」

「あ、うん。地球儀見たことあるからそれは知ってるよ」

「ま、眩しっ！」

「え？」

「こっちのことよ。気にしちゃ駄目よ。それより、拓。あんた、まだお笑い芸人になりたいとか思ってる？」

「え？ うん」

「じゃあ、小○よしおみたいになりたい？」

「うーん……それは、ヤダ」

「そうね。よかったわ。もしここで肯かれでもしたら、全力で阻止に打って出るとこだったわ」

「え？」

「こっちのことよ。それよりあんた、そろそろガオレンジジャー始まる時間よ？」

「あっ！ ほんとだ。ありがと、クサヤおぼちゃん」

「……ねえ、拓。あんた、ガオレンジジャー好き？」

「うん！ 大好きだよ！」

「じゃあ、将来ガオレッドになりたい？」

「うんっ！」

「——ふん……」

12 魔法少女 13 魔法少女2 14 釈然としない 15 今の間は？

12 魔法少女

「――ってことが昨日あったわけよ。ほんとに子供って奴は人騒がせな生き物よね……」

「あはは。かわいいじゃない拓君」

「笑い事じゃないわよ、レイちゃん。振り回されるこっちの身にもなってほしいわ。『ガッオ、ガッオ、ガッオッレンジャ〜♪』じゃないってのよ」

「でも、その気持ち分かるな。私も小さい頃魔法少女ユッコちゃんになりたかったもの」

「レイちゃんなら頑張れば今でもなれそうよね」

「いいね。お茶汲みも書類のコピーも魔法のステッキで一振りよ」

「これが魔法少女のなれの果てか（ぼそり）」

13 魔法少女2

「でも気になるのよね」

「え。なにが？」

「『出戻り』の犯人よ。誰がそんなこと拓に吹き込んだのかしら。結局、あれからうやむやになってるけど」

「もう、どうでもいいんじゃない？」

「何言ってるの。また変なこと吹き込まれて帰ってきたらとぼっちは私に来るのよ」

「あ、そっか。大変だね」

「今のところ番長が一番可能性高いと思うんだけど」

「へー小学校に番長がいるんだ。楽しそうだね」

「いや、楽しくはないでしょうよ」

「うーん……。あ！」

「な、なに？」

「私が魔法のコンタクトで過去の出来事を覗いてあげようか？」

「どうもありがとう」

14 釈然としない

「もういいのよ、レイちゃん。お目覚めの時間よ。現実のあなたは
今、会社の休憩室でお昼休みに同僚とおしゃべりをしてるのよ」

「そうだね」

「はあ……。どうしたもんかしらねえ……」

「しょせん子供じゃない。本気で相手をする可不いと思うな」

「そ、そうよね。しよせん子供……よね？」

「そうそう」

「……」

「……？」

「——魔法少女？」

「ユッコちゃん」

「……」

「な～に？」

15 今の間は？

「でも、拓君みたいなかわいい子供、私も欲しいな」

「え……！」

「？　な～に？」

「いや……うん……つかぬことを伺いますが」

「な～に？」

「レイちゃん、子供の作り方知ってる？」

「……」

「……」

「……知ってるよ～」

「今の間はどう解釈すべきなの（ぼそり）」

16 精神的に 17 十年後 18 冗談? 19 冗談?..?

16 精神的に

「まあ、私達まだ22だしね。子供はまだ早いと思うわ。そうなる
と自動的に結婚ってことになるし」

「あ、いいね、寿退社。幸せそう」

「確かに労働から解放されるのは魅力的よね」

「そうだね。お茶汲みと書類のコピーって大変だもんね」

「……ええ、精神的にもね」

17 十年後

「だったら、早くいい相手見つけないとね。咲弥ちゃんは恋人いるの？」

「……いないわよ。レイちゃんはどうかなの」

「私もないよ」

「……」

「……？」

「……なんか、来年の今頃も私達ここでこの時間にこんな話してそうじゃない？」

「そうかな」

「十年後の自分が心配になってきた……」

「そうかな」

「あ、でも十年後には拓君も大人になってるよね」

「まあ、十年後は拓も18だし結婚できる年齢にはなってるわね」

「えへへ」

「……なに？」

「いき遅れたら、拓君とくつついちゃえぼ？」

「いや、冗談でしょ？」

「えへへ」

「姉の息子と結婚なんて血迷ったことしないわよ。ってか、法律上それって問題じゃないの」

「じゃあ、今度咲弥ちゃんの家遊びに行っていいい？」

「——ちょっと待って。今『じゃあ』でつなげた？」

「えへへ」

「……冗談、よね？」

「えへへ」

19 冗談?？」

「あ、咲弥ちゃん。お昼休みもう終わるよ」

「あ、う、うん……」

「ほら、早く。いこいこ」

「そ、そうね」

「あ、ねえ咲弥ちゃん」

「え?」

「今度のおやすみ、咲弥ちゃんの家遊びに行くね」

「……え?」

20 死守 21 友達だから 22 年上がお好み

20 死守

「――って、わけで拓。今日、私の友達が遊びに来るから十分気をつけるのよ」

「? なにに気をつけるの?」

「冗談か、本気かに」

「? ?」

「やっぱ、いいわ。あんたはありのままできて。いざとなったら私が死守したげるから」

「『ししゅ』ってなーに?」

「死んでも守ることよ」

「え! クサヤおばちゃん死ぬの!?」

「向こうの出方によるわ」

21 友達だから

「ぼ、僕クサヤおばちゃん守るよ!?! クサヤおばちゃんの友達は僕がやつつける!」

「うんうん。ありがとね、拓。でもやつつけちゃ駄目なのよ」

「えっ! ……な、何で?」

「だって、友達だもの」

「で、でも……」

「友達は大切にしなきゃね?」

「あ、う、うん……」

「でも、拓が家にいると私は友達に――」

「ぼ、僕、外で遊んでくるっ!」

「いい子ねえほんと(ぼそり)」

22 年上がお好み

「えゝ拓君いないのゝ。残念だなゝ」

「ごめんね。レイちゃんが会いに来るって言ったのに、拓ったら外で遊ぶって聞かなくて」

「あはは。拓君って腕白なのねゝ」

「ま、子供は風の子ってやつね」

「じゃあ、これから遊びに行かないゝ？ 駅前にできた新しい洋服屋さんも行ってみたいしゝ」

「え？ 私は構わないけど、いいの？」

「なにがゝ？」

「いや、拓に会って行かなくて」

「いいよゝ。また今度会いに来るからゝ」

「……ねえ、レイちゃん。つかぬことを聞くけど、レイちゃんって年下の男が好き——なのよね？」

「えゝ。私は年上の男の人がいいなゝ」

「——へー……」

23 おばちゃんじゃない 24 同い年だし 25 火に油

23 おばちゃんじゃない

「じゃあ、行きましようか。——って、あれ？」 咲弥ちゃん、この子だあれ？」

「え？ ってあれ、拓？ あんた、なんでいるの。外に遊びに出てたんじゃないの？」

「あ……うん。クサヤおばちゃんのこと心配で、途中で戻ってきたの……」

「え、じゃあ、この子が噂の拓君？」 きゃーかわいー」

「とても私の姉の息子とは思えないほどね」

「——あ、あのう……。クサヤおばちゃんのお友達ですか……？」

「はい、そうですよ。初めまして。私『クサヤおばちゃん』のお友達で、麗っていうの。よろしくね、拓君」

「うおい！」

24 同い年だし

「あ、ど、どうも初めまして。僕、川上拓かわかみたくです。八歳です。よろしくお願いします」

「あらゝ。きちんと挨拶できて偉いねゝ」

「……」

「？ どうしたのかなゝ？ お姉ちゃんとお話するの恥ずかしいかなゝ？」

「あ、あのう……お姉さんは……」

「あ、私のことは『レイお姉ちゃん』でいいよゝ。その代り、私もたつくんって呼んでいいかなゝ？」

「あ、う、うん」

「えへへ。よろしくねゝ、たつくん」

「よ、よろしく。レイお姉ちゃん」

「うおい！」

25 火に油

「おかしいでしょ、拓！ 私とレイちゃん同年よ、同年！ なのに、なんでレイちゃんは『レイお姉ちゃん』で、私は『クサヤおばちゃん』なのよ！ この差は一体何な訳！？」

「あう……だ、だって、レイお姉ちゃんなんだか、ほんわかしてるんだもん。それに……」

「私がおばさん臭いって言いたいわけ！？ 拓！ あんたいい度胸してんじゃないの！？」

「あうう……。クサヤおばちゃんが怖い……」

「……この期に及んでまだ、おばさん呼ばわり？ たあくう？」

「まあまあ、咲弥ちゃん。子供相手に大人気ないよ。たつくん怖がつてるじゃない。かわいそうだよ」

「うう……。怖いよう……」

「それにね、子供は素直だからしょうがないのよ（悪気はない）」

「ほう？。」

「ううう……。」

26 どうでもいい 27 おばちゃんでした 28 あんたに言われたくない

26 どうでもいい

「ぼ、僕……クサヤおばちゃんのこと助けに来たのに……」

「そんなことはどうでもいいわ」

「え……!」

「? なんのこと?」

27 おばちゃんでした

「あれゝ。ねえ、咲弥ちゃんゝ。たつくんって確か、咲弥ちゃんのお姉ちゃんの子供なのよねゝ?」

「え？　そうよ。私の甥よ。ってか、今それどころじゃ――」

「つまり、咲弥ちゃんはたっくんの『叔母』さんよね？　だった
ら、おばちゃんでもいいんじゃない？」

「――あ……」

「――ってことで、たっくん。たっくんは何にも悪くないんだよ
。全部、咲弥ちゃんの被害妄想だからね」（悪気はない）」

「う……」

「『ひがいもうそう』ってなーに？（もちろん悪気はない）」

「傍迷惑な妄想のことだよ（あくまで悪気はない）」

「うう……」

「『はためいわく』って？（とことん悪気はない）」

「今の咲弥ちゃんがそうだよ（ある意味最強）」

「ううう……もう許して……」

28 あんたに言われたくない

「あ、ねえねえ、たつくん？ そんなことより」

「そ、そんなこと……？」

「なあに？ レイお姉ちゃん」

「咲弥ちゃんが気にしてたよ？ 「出戻り」って言葉誰から聞いたのかなって」

「そうなの？ んとね、学校から帰ってる時にね——」

「ちよっ！ 待って拓、ストープ！」

「な、なあに？ クサヤおばちゃん」

「？ どうしたの、咲弥ちゃん？」

「なあに、も、どうしたのもないわよ！ あんた私が聞いた時は答えなかったくせに、レイちゃんにはなににあっさり答えようとしてんのっ」

「え？ でも、あれはお話してる間にクサヤおばちゃんが聞くの忘れただけじゃないの？ 僕もそうだけど」

「う……」

「あはは〜。咲弥ちゃんったら抜けてるね〜」

「……」

29 知りたいけど 30 二の舞い 31 変質者？

29 知りたいけど

「と、とにかく、納得いかないのっ！ なんだかんだで、結局私が聞き出せなかったってことに変わりはないんだから、それをこんなあっさり——」

「じゃあ、咲弥ちゃん知りたくないんだ？」

「いや、それとこれとは話が別よ」

30 二の舞い

「じゃあ、たっくん。教えてくれるかな？ 誰がたっくんに『出戻り』を吹き込んだの？」

「え？ 『吹き込む』 ってなーに？」

「あ、えっとね。吹き込むって言うのは――」

「駄目！ 駄目よ、レイちゃん！」

「？ 急にどうしたの、咲弥ちゃん？」

「いい、レイちゃん？ そうやって、何でもかんでも拓の質問に答えてたら、話がいつの間にか全く別の方向に飛んで行って、最後にはうやむやになっちゃうのよ。私の二の舞になっちゃうわよ」

「そっか。危なかった。ありがと、咲弥ちゃん」

「ま、私の方が拓とはちょっとだけ付き合い長いからね（今日で出会って10日）」

「すごいな。咲弥ちゃん」

「ふふ。よしてよ、レイちゃん。――さあ、拓。観念して質問に答えなさい」

「う、うん……」 ↑ 『かんねん』 ってなに？ とは聞けない。

「えっとね、学校から帰ってる途中に知らないお兄さんに声かけられてね」

「え、ちよっ……知らないお兄さんって——」

「咲弥ちゃん。最後までちゃんとたっくんの話聞いてあげなきゃ、また話逸れちゃうよ？」

「そ、そうね。続けて、拓」

「うん。知らないお兄さんに声かけられてね——」

「——やあ、坊や。今、帰り？」

「？ うん」

「そっか。ところで、坊や。君、出戻りって言葉知ってる？」

「ううん。なあに、それ」

『帰ったらお家の人に聞いてごらん？ お兄さん明日もこの時間にこの辺にいるから、意味が分かったら、明日お兄さんに教えてね』

『うん。なんだか分かんないけど、分かった』

『あ、言っとくけど、お兄さんのことはお家の人に話しちゃ駄目だ

よ？
』

『え？　なんで？』

『いいから、いいから。じゃ、また明日ね』

「——って、わけなの」

「……そ、それって……あんた……」

「？　なあに、クサヤおばちゃん」

「……いや……その……」

「変質者かな？」

32 こうなるから 33 ストライク 34 ちょっと 35 果敢に

32 こうなるから

「ち、ちよつと、レイちゃん！ 子供の前でそんな言葉使っちゃダメでしょ!？」

「えゝなんでゝ？」

「『へんしつしゃ』ってなーに？」

「こうなるから！」

「あ、そつかゝ。ごめんねゝ」

33 ストライク

「ねえ、クサヤおばちゃん。『へんしつしゃ』って？」

「あ……えっとねえ……それは、その……なんていうか——」

「おかしな人のことだよ」

「ちょっ！」

「おかしな人？」

「そうだよ。頭がおかし——」

「八歳児に直球ど真ん中な解説はやめてえ！」

34 ちよつと

「そっか。そうだよね。ごめんね。咲弥ちゃん」

「いいから、レイちゃんはちょっと黙っててね」

「うん」

「さて。——拓？」

「な、なあに……？」

「……ちよつと考えさせて」

「う、うん……」

35 果敢に

「——待たせたわね、拓。いい？」

「う、うん」

「変質者っていうのは、実は悪者なのよ」

「え……そうなの？ でも、あのお兄ちゃん悪者には見えなかったよ？」

「だまされちゃ駄目よ、拓。ほら、前回のガオレンジャーで、悪役超人が人間に化けてガオレッドに近づいてきてたじゃない？」

「あ……うん！」

「あれと同じなのよ。変質者ってのは、見た目は優しそうでもほんとは悪い奴なのよ」

「見るからに変質者な人もいるけどね」

「……レイちゃん」

「あ、つい」

「とにかく、そいつは悪者だったの。分かった？ 拓」

「う、うん！　じゃあ、今度会ったら僕あのお兄ちゃんやつつけるね！」

「え、ちょ……」

「あら。たっくん、かっこい」

36 丸呑(まるの)み 37 どうせなら 38 シナリオ

36 丸呑^{まるの}み

「だ、駄目っ！ 駄目よ、拓、今度はホントに駄目っ！」

「えー、なんで？」

「そっか。たっくん可愛いから食べられちゃうかもしれないもんね」

「……」

「？ 変質者は人を食べるの？」

「そっだよ」

「……クサヤおばちゃん？」

「え！ え、えーと……な、なんていうか……ある意味、でね？」

「ある意味って？」

「……あ、あんたの想像通りよ」

「ええっ！　じゃあ、ホントに丸呑みにしちゃうの！」

「怖いね」

「……」

37 どうせなら

「と、とにかく、あんたの手には負えないから、間違ってもやっつけようとしちゃ駄目よ。今度見かけたらとにかく近寄らずに逃げなさい。それと、あんた携帯電話持たされてたわよね。私の番号教えてくから、見つけたらすぐに私の番号にかけて来なさい。いい？」

「う、うん」

「でも、咲弥ちゃん。どうするの？」

「と、とにかく、一度そいつと話つけるしかないわね。本物かどうか確かめとかないと」

「でも、本物だったら危ないよ。咲弥ちゃんもおいしそうだもん」

「どうせなら、可愛いつて言って……」

38 シナリオ

「ねえ、咲弥ちゃん。とりあえず、たっくんのお母さんにはこのこと報告しといたほうがいいんじゃない?」

「それは絶対駄目よ」

「あ、そっか。そういえば、今、咲弥ちゃんのお姉ちゃん大変だつてこの前聞いたけど」

「ええ。実家^{ウチ}に帰って来てからは、完全に心を病んで部屋に引きこもってるの。部屋に入れるのは愛息子の拓だけよ。今うかつに刺激しようものなら……」

「じゃあ、全部話して咲弥ちゃんのお姉ちゃんに、変質者をやっつけてもらうっていうのはどう?」

「……最悪のシナリオだわ」

39 大人の話 40 ふつつつと沸き上がる 41 陰湿かつ大胆

39 大人の話

「そっか。じゃあ、周りにばれても駄目なのね」

「ええ。噂になって間違ってヤツ（実姉）の耳に入ってもアウトよ。時限爆弾より慎重に扱わないと、暴発しちゃうわ」

「大変だね。咲弥ちゃん」

「まあね……」

「たっくんも、大変だね」

「……？」 ↑二人の話がよく分からない。

40 ふつつつと沸き上がる

「それより、拓？ あんたそのお兄さんに変なことされなかった？」

「う、うん。大丈夫だよ」

「じゃあ、その後お兄さんと会ったりした？」

「ううん。会ったのは二回だけだよ」

「二回？ ってことは、出戻り騒動（1～3話参照）の翌日に、もう一度そいつに会ってるの？」

「あ、そっか。たっくんの話じゃ、明日もう一度会おうって言ってるもんね」

「――で、会ったのね？」

「うん。『出戻り』っておとぎ話だったんだねって言ったら、お兄さんすごく笑って、満足そうに帰っていったよ。あ、そういえばクサヤおばちゃんによろしくって言ってた」

「……野郎」

「あはは」

41 陰湿かつ大胆

「これで変質者の目的が分かったわね」

「えゝ。分かったのゝ？ 咲弥ちゃんすごいねゝ。教えてゝ」

「おそらく変質者は、ウチの事情を知ってるのよ。その上で、拓に『出戻り』を吹き込んでウチでその意味を家族の誰かに聞くように仕向けた」

「それってゝ」

「あからさまに嫌がらせね」

「わゝ。陰湿かつ大胆だねゝ」

「……ふふ。どこのどいつか知らないけど、随分コケにされたもんだわ……」

「咲弥ちゃんゝ。目が怖いよゝ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7697f/>

たっくんとクサヤおばちゃんと

2010年10月11日22時03分発行